

意見聴取会 意見陳述申込書

天塩川流域委員会 宛

天塩川の河川整備・管理について、次のとおり意見を述べたいので申し出します。

1. 意見陳述申込者

平成17年3月2日

ふりがな
こ 氏 名

年齢 67 歳

性別 (男) 女

こ 住 所 名寄市

2. ご 意 見

別紙の通り

※上記のご意見記入欄が不足する場合は、本意見陳述申込書と併せて別紙で提出して下さい。

古里を離れて半世紀余りの歳月が流れた。春先雪解け水を集めて濁流となる暴れ川も当時は考えられないほど穏やかになった。私の生まれは中川町字国府、電気もラジオもない天塩川の河口にほど近い寒村である。天塩川を隔てた学校に行くには夏は川船で、冬は張りつめた氷の上を歩く、通称氷橋である。氷が川を埋めると国府の住民は総出で柳の枝を敷き詰め雪をかぶせその上に水をかけて凍らせる、人はもとより丸太を積んだ馬籠も通るのであるから大変丈夫な橋といえる。

村人は氷の上に水がたまると「うわ水が走る」といってこの氷橋の寿命が幾ばくも無いことを察知する。春になると氷橋も流れて水面が顔を出し、水嵩が増して暴れ川に変身する。堤防も無かったこの地方はせっかく植えた馬鈴薯も、トウモロコシも土砂と塵を被る。収穫に見放された村人はあきらめ顔で呆然と河岸に立ちつくす。まさ毎年をを賭で生きる状況にあった。

しかし、清流に戻った天塩川は恵みの川となる、丸太の運搬は筏を組んで流し、貴重な蛋白源はウグイが主流であった。大型のものは延縄をかけ、小型のものはガラス洞で捕って煮干しにもした。砂地になっている川底にはカラス貝が足の裏が痛いほど生息し、泳いだ後はみんなで焼いて食べた、少し堅いが最高のおやつであった。

春水の濁流で川船が転覆し、児童17人を含む19人全員が死亡するという悲惨な事故があった、そのとき姉と従兄弟2人が犠牲になっている。そのような忌まわしい思い出がある反面生きる力を与えてくれたのも天塩川だと思っている。

今では堤防もつき水害もない、おかげさまで農業をおろそかにしながらも親父が奔走し架かった歌内橋も新しく掛け替え工事をしている。

米の採れないこの地方はジャガイモの生産が盛んでどこの集落にも澱粉工場があった、この茶色な廃液の注ぐ小川は魚の住めない川に変えていった。思うと半世紀以前から川の汚染は始まっていたのであろう。今はいろいろな廃液も浄化処理され排出されるためか水質も昔に戻りつつあるように思うし、小さな沼も下拓され小川に切り替えられ天塩川の河川敷もきれいに整備され人々の憩いの場となっている。しかし清水を好む「カラス貝」は今は幻なのであろう。

30年前名寄の智東から中川町国府(生まれ故郷)までボートで下ったことがある。水量も今よりやや多く、河岸には柳の木が残っていて水鳥の隠れ場所も多かった。昔氷橋で渡ったところに架かっている歌内橋をぐり2日間の川下りを楽しんだがずいぶん開発が進んだなあと思う。

開発が進み便利になることは大いに結構である、特に食べ物の80%を海外に依存している日本は食糧基地としての北海道の存在が今にも増して重要な時代がくると確信している。

これからも自然との調和を図りながら山を治め、川を治め、遠くを見つめながら道民が一つになって、子々孫々のために足腰を鍛えておく必要があろう。